外国語教育メディア学会（LET）

関西支部 2017 年度 春季研究大会

共催：関西英語教育学会（KELES）

発表要項集

日 時： 2017 年 6 月 10 日（土）9:40～17:50

場 所： 近畿大学（東大阪キャンパス）
Kindai University
〒577-0818 大阪府東大阪市小若江 3-4-1
http://www.kindai.ac.jp/

主 催： 外国語教育メディア学会（LET）関西支部

事務局： 〒278-8510 千葉県野田市山崎 2641
東京理科大学 理工学部教養 山西博之研究室内
Tel: 04-7124-1501（代表）
E-mail: kansailet@gmail.com

プログラム

9:30-15:40　受付 ■ B 館 3 階ロビー

9:40-9:55　開会行事 ■ 301 教室

司会 ◆ 山西 博之（事務局長・東京理科大学）

挨拶 ◆ 杉森 直樹（支部長・立命館大学）

挨拶 ◆ 里井 久輝（関西英語教育学会会長・龍谷大学）

10:00-11:40　ワークショップ１ ■ 302 教室（**当日先着順で 50 名まで**）

講師 ◆ 岩居 弘樹（大阪大学）

学生の携帯端末を授業に活用する方法

ワークショップ２ ■ 303 教室（**当日先着順で 50 名まで**）

講師 ◆ 水本 篤（関西大学）・斉藤 一弥（University of London）

英語論文を書いて国際ジャーナルに掲載させるためのストラテジー

ワークショップ３ ■ 309 教室 （**当日先着順で 50 名まで**）

講師 ◆ 中井 弘一（京都橘大学）

「アクティブ･ラーニング」から「主体的・対話的で深い学び」へ

10:00-16:00　業者展示 ■ B 館 3 階廊下

11:45-12:45　昼食・休憩 ■ ブロッサムカフェ 1 階・Cafeteria November・310 教室など

11:45-12:45　Classroom Tips ■ 303 教室　　司会 ◆ 福島 祥行（大阪市立大学）

①11:45-12:05　②12:05-12:25　③12:25-12:45（Tips デモ 10 分 ＋ 質疑応答 10 分）

（Luncheon seminar ですので参加者は昼食をご持参ください）

① 生徒の意見を電子ファイル／掲示物として一気にまとめる方法

真島 由朱（大阪府立箕面高等学校）

② Kahoot! で簡単クイズを作ってみよう

長谷川 由美（近畿大学）

③ 360 度カメラを使った授業記録とふりかえり

矢野 浩二朗（大阪工業大学）

11:45-12:45　運営委員会 ■ 202 教室

12:50-13:25　支部総会 ■ 301 教室

13:30-15:20　研究発表・実践報告　　①13:30-14:00 ②14:10-14:40 ③14:50-15:20

第 1 室 ■ 303 教室　　司会 ◆ 溝畑 保之（大阪府立鳳高等学校）

① 【招待発表】Effects of Implicit and Explicit Form-focused Instruction on Low-Intermediate Learners' Grammar Acquisition

Natsuko Shintani（The University of Auckland）

② 高校での Moodle を使用した反転授業の実践報告

上田 愛（大阪府立長野高等学校）・篠崎 文哉（大阪教育大学附属天王寺中学校）・上田 瑠璃（大阪教育大学 大学院生）

③ ラウンド制授業により検定教科書を徹底多聴多読させた 1 年間の実践発表：共有出来る読解聴解対応力養成授業の普及を目指して

幸前 憲和（株式会社クロスインデックス）

第２室 ■ 304 教室　　司会 ◆ 竹蓋 順子（千葉大学）

① 【招待発表】分散学習は意味的に関連した単語の習得を促進するか？：干渉効果と分散効果の検証

中田 達也（関西大学）・鈴木 祐一（神奈川大学）

② 会話相手による L2 WTC の変化について：L2 能力の異なる学習者群の比較から

鎌田 理星（関西大学 大学院生）

③ 日本の高校生のデジタル媒体「宿題」に関する認知：Cengage Learning- MyELT を使用した混合研究法調査

小島 修司（啓明学院中学校高等学校，テンプル大学 大学院生）

第３室 ■ 305 教室　　司会 ◆ 西田 理恵子（大阪大学）

①【招待発表】英語論文執筆支援ツール AWSuM の有用性の検討―パイロット・スタディ―

水本 篤（関西大学）

② 日本語母語話者が持つ音象徴の感覚：架空キャラクターのネーミング調査から

中西 のりこ（神戸学院大学）

15:20-15:40　休憩 ■ 310 教室など

15:40-17:40　関西英語教育学会・外国語教育メディア学会関西支部共催 特別シンポジウム ■ 301 教室

「明示的指導の理論と実践：発音・語彙・文法指導への可能性」

パネリスト ◆ 発音：斉藤 一弥　（University of London）

語彙：中田 達也　（関西大学）

文法：鈴木 祐一　（神奈川大学）

指定討論者 ◆ 新谷 奈津子　（The University of Auckland）

17:40-17:50　閉会行事 ■ 301 教室

18:10-20:10　懇親会 ■ ブロッサムカフェ 3 階　多目的ルーム（B 館の斜め向かい）

司会 ◆ 小山 敏子（副支部長・大阪大谷大学）

挨拶 ◆ 泉 惠美子（関西英語教育学会副会長・京都教育大学）

お知らせ

- 参加者は、受付にて必ず参加登録票にご記入のうえ、ネームホルダーをお受け取りください。LET 会員・KELES 会員は無料です。非会員の方は当日会費 2,000 円（大学院生は、学生証を提示していただくと 1,000 円）を受付でお支払いください。また、学部生は無料でご参加いただけます。なお、支部大会当日にご入会いただくことも可能ですので、支部事務局（受付）までお申し出ください。
- 昼食は、学内の食堂、または大学周辺の飲食店をご利用ください。
- 館内は全面禁煙です。
- 懇親会はブロッサムカフェ 3 階 多目的スペースにて開催いたします。参加費は 2,000 円（学生 1,000 円）です。当日、受付にてお申し込みください。

特別シンポジウム
『明示的指導の理論と実践：発音・語彙・文法指導への可能性』

パネリスト　発音：斉藤　一弥（University of London）
語彙：中田　達也（関西大学）
文法：鈴木　祐一（神奈川大学）
指定討論者　新谷　奈津子（The University of Auckland）

聞き取りやすい発音」習得を目指して：
優先的に学習するべき項目と効果的な教授法

Effects of Instruction on Second Language Pronunciation Development: What and How to Teach?

斉藤　一弥（University of London）

キーワード：聞き取りやすい発音習得, 学習優先順位, 明示的学習, タスク, フィードバック

将来，国際社会で活躍する優秀な日本人のビジネスリーダー，研究者をより多く育成する上で最も重要な問題の一つが，業務を英語で遂行出来る「高度なスピーキング能力」の習得である。そうした目標達成のために適切な発音指導が大変大切な役割を果たす訳だが，英語が世界共通言語として使われている現状を考えると，必ずしも日本人英語学習者は「アクセントが全く無い発音」を目指すのではなく，「聞き取りやすい発音力」の習得を目標とすべきである事は，研究者，教育者の双方において合意されるところである。

発表者はこれまでに国内・国外の大学の研究者達とチームを組み，日本人英語学習者を対象にして様々な実証研究を行ってきた。そこで本発表では，こうした一連の研究結果を踏まえて，日本人英語学習者はどの発音項目を優先的に学習していくべきか（what-to-teach），そしてそうした重要な発音項目を，明示的指導，タスクなどを取り入れて，どの様に効果的に指導していくべきか（how-to-teach），の 2 点について考察する。

参考文献

Derwing, T. M. & Munro, M. J. (2015). Pronunciation fundamentals: Evidence-based perspectives for L2 teaching and research. Amsterdam: John Benjamins.

Lee, J., Jang, J., & Plonsky, L. (2015). The effectiveness of second language pronunciation instruction: A meta-analysis. *Applied Linguistics, 36*, 345–366.

Saito, K. (2012). Effects of instruction on L2 pronunciation development: A synthesis of 15 quasi-experimental intervention studies. *TESOL Quarterly*, 842-854.

Saito, K., Trofimovich, P., & Isaacs, T. (2016). Second language speech production: Investigating linguistic correlates of comprehensibility and accentedness for learners at different ability levels. *Applied Psycholinguistics, 37*, 217-240.

第二言語語彙習得を促進する方法：検索・分散効果・遅延効果を中心に

Optimizing Second Language Vocabulary Learning: Effects of Retrieval and Spacing

中田　達也（関西大学）

キーワード： 語彙習得，検索，分散効果，遅延効果

"Without grammar very little can be conveyed, without vocabulary nothing can be conveyed" (Wilkins, 1972, p. 111)という言葉に示されている通り，語彙は外国語学習者にとって最も重要な知識の 1 つであると考えられる。どのようにすれば第二言語における語彙習得を促進できるかは，研究者のみならず，教員・学習者にとっても大きな課題である。

語彙習得に大きな影響を与える要因の 1 つに，検索（retrieval）の有無がある。ここでいう検索とは，貯蔵された記憶を取り出すことを指す。例えば，「犬は英語で何と言いますか？」とたずねられ，"dog"という記憶を頭の中から取り出すことは，検索の一例である。これまでの研究では，検索が語彙習得を促進することが示されている(e.g., Karpicke & Roediger, 2008; Nakata, in press)。

語彙習得を促進する上でもう 1 つ重要なのは，どのようなスケジュールで復習を行うか，ということである。復習スケジュールは，集中学習(massed learning)と分散学習(spaced learning)とに分類される。集中学習とは，間隔を置かずにある学習項目を複数回繰り返すことである。一方で分散学習とは，間隔を置いてある学習項目を複数回繰り返すことを指す。これまでの研究から，分散学習の方が集中学習よりも語彙習得を促進することが示されている。この現象は分散効果(spacing effect)と呼ばれる(e.g., Nakata, 2015)。分散学習が集中学習よりも効果的だとした上で，どのくらいの間隔を空けて繰り返せば良いのだろうか？　これまでの研究では，長い学習間隔の方が，短い学習間隔よりも長期的な記憶保持を促進する可能性が示されている。これは，遅延効果(lag effect)と呼ばれる現象である(e.g., Nakata, & Webb, 2016)。

本発表では，検索・分散効果・遅延効果等を利用した上で，外国語における語彙学習を促進するための方法について考察する。

参考文献

Nakata, T. (2015). Effects of expanding and equal spacing on second language vocabulary learning: Does gradually increasing spacing increase vocabulary learning? *Studies in Second Language Acquisition, 37*, 677-711. doi: 10.1017/S0272263114000825

Nakata, T. (in press). Does repeated practice make perfect? The effects of within-session repeated retrieval on second language vocabulary learning. *Studies in Second Language Acquisition*. doi:10.1017/S0272263116000280

Nakata, T., & Webb, S. A. (2016). Does studying vocabulary in smaller sets increase learning? The effects of part and whole learning on second language vocabulary acquisition. *Studies in Second Language Acquisition, 38*, 523-552. doi: 10.1017/S0272263115000236

Karpicke, J. D., & Roediger, H. L. (2008). The critical importance of retrieval for learning. *Science, 319*, 966–968.

Wilkins, D. A. (1972). *Linguistics in language teaching*. London, UK: Arnold.

SLA 研究に基づく効果的な繰り返し文法練習の原理：教室での指導とカリキュラムへの示唆

Principles of Repeated Practice for Second Language Grammar Acquisition: Implications for Instruction and Curriculum

鈴木　祐一（神奈川大学）

キーワード：効果的な繰り返し練習，手続き化・自動化，Lag Effect(遅延効果)

日本の高校生を対象とした調査では，中学校で学んだ基礎的な文法能力の定着が十分でないことが明らかになっている(金谷, 2017)。このような調査結果から，以前に学んだことを定着させるために繰り返し練習を行う必要があると言えよう。それでは，どのようにすれば，効果的な文法練習をデザインできるのか？本発表では，第二言語習得(SLA)研究から，繰り返し練習を効果的に行うための原理を紹介する。具体的には，「何を」，「どのように」，「いつ」，繰り返すかという 3 つの観点から，SLA 研究で分かっていることを概観する。そこで得られた知見から得られる理論的な示唆に加えて，教室指導とカリキュラムへの示唆について考える。

主要参考文献

金谷憲 編著 (2012) 『高校英語教科書を 2 度使う！ 山形スピークアウト方式』東京:アルク.

金谷憲 編著・臼倉美里・大田悦子・鈴木祐一・隅田朗彦 著 (2017) 『高校生は中学英語を使いこなせるか？～基礎定着調査で見えた高校生の英語力～』東京:アルク.

Bird, S. (2010). Effects of distributed practice on the acquisition of second language English syntax. *Applied Psycholinguistics, 31*, 635-650.

Boers, F. (2014). A Reappraisal of the 4/3/2 Activity. *RELC Journal, 45*, 221-235.

Cepeda, N. J., Vul, E., Rohrer, D., Wixted, J. T., & Pashler, H. (2008). Spacing effects in learning a temporal ridgeline of optimal retention. *Psychological Science, 19*, 1095-1102.

De Jong, N., & Perfetti, C. A. (2011). Fluency training in the ESL classroom: An experimental study of fluency development and proceduralization. *Language Learning, 61*, 533-568.

Hattie, J. (2009). *Visible learning: A synthesis of over 800 meta-analyses relating to achievement*. New York: Routledge.

Hawkes, M. L. (2012). Using task repetition to direct learner attention and focus on form. *ELT Journal, 66*(3), 327-336.

Kim, Y., & Tracy-Ventura, N. (2013). The role of task repetition in L2 performance development: What needs to be repeated during task-based interaction? *System, 41*, 829-840.

Lambert, C., Kormos, J., & Minn, D. (2017). Task repetition and second language speech processing. *Studies in Second Language Acquisition, 39*, 167-196.

Miles, S. W. (2014). Spaced vs. massed distribution instruction for L2 grammar learning. *System, 42*, 412-428

Rogers, J. (2015). Learning second language syntax under massed and distributed conditions. *TESOL Quarterly, 49*, 857-866.

Suzuki, Y. (2017). The optimal distribution of practice for the acquisition of L2 morphology: A conceptual replication and extension. *Language Learning, Early View*.

Suzuki, Y., & DeKeyser, R. M. (2017). Effects of distributed practice on the proceduralization of morphology. *Language Teaching Research, 21*, 166-188.

Thai, C., & Boers, F. (2015). Repeating a monologue under increasing time pressure: Effects on fluency, complexity, and accuracy. *TESOL Quarterly, Early View*.

学生の携帯端末を授業に活用する方法

How to Use Mobile Devices in the Classroom

岩居　弘樹（大阪大学）

キーワード：音声認識，ビデオ撮影，達成感

1. はじめに

このワークショップでは，タブレット端末を活用したアクティブな外国語授業の一例をご覧いただき，実際に携帯端末で利用できる様々なツールを体験いただく予定です。 ICT ツールは今までの学習方法を”enhance"するような使い方だけでなく，ICT ツールを導入することで初めて実現できる学習方法もあります。みなさまと一緒にいろいろな可能性を考えたいと思います。

2. 授業で使用しているアプリと活用方法

(1) 語彙トレーニング

Quizlet は無料の Flash Card サービスです。有料アカウントを取得するとクラスの進捗チェック，ボイスレコーダー，Quizlet Live というゲームを利用できます。PC でもスマホでも利用可能です。

(2) 音声認識アプリ

スマホの音声認識機能を使用したり，Dragon Dictation (iOS)，Speechnotes (Android) などのアプリを使うこともできます。Speechnotes は PC のブラウザ Google Chrome でも利用できます。

(3) 合成音声アプリ

Word Wizard を使って，アルファベット，単語，数字の発音を確認しています。これは子供向けの iOS アプリで，英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語などのバージョンがあります。この他にも無料のアプリやオンラインサービスが多数あります。

(4) タブレット対応授業支援システム

ロイロノートスクールで出席管理，資料配布，Web ページの配信，学習成果の提出，オンラインテストなどを行なっています。

(5) ビデオ撮影

スマホ・タブレットを使って，学習成果をグループでビデオ撮影し，YouTube でシェアします。

3. 授業で使ってみると・・

これらのツールを使って授業を組み立てることで，学習者が外国語を声に出して練習する機会が大きく増えます。従来の授業に音声認識とビデオ撮影を入れるだけでもクラスが活性化したというケースも見られます。点数以外のフィードバックと目に見える達成感が学習の動機づけに役立っているようです。

参考文献

岩居弘樹，「外国語学習とアクティブラーニング」，　『英語教育徹底リフレッシュ　グローバル化と 21 世紀型の教育』，今尾・岡田他編 開拓社, pp.80 - 92，2017 年 4 月.

岩居弘樹，「話して演じて振り返る—iPad が支えるドイツ語アクティブラーニングの一例—」，『最新 ICT を活用した私の外国語授業』吉田・野澤編著，丸善プラネット，pp.142 - 154，2014 年 3 月.

岩居弘樹，音声認識アプリとビデオ撮影を活用した外国語学習：http://bit.ly/ADEFLLxiPad (iTunes U).

（今回ご紹介するアプリなどは以下に掲載します：https://osaka-u.padlet.org/iwaihiroki/2017LETKansai ）

英語論文執筆支援ツール AWSuM の使い方

How to Use an Online Writing Support Tool "AWSuM"

ワークショップ：英語論文を書いて国際ジャーナルに掲載させるためのストラテジー１

How to Publish Research Papers in International Journals

水本　篤（関西大学）

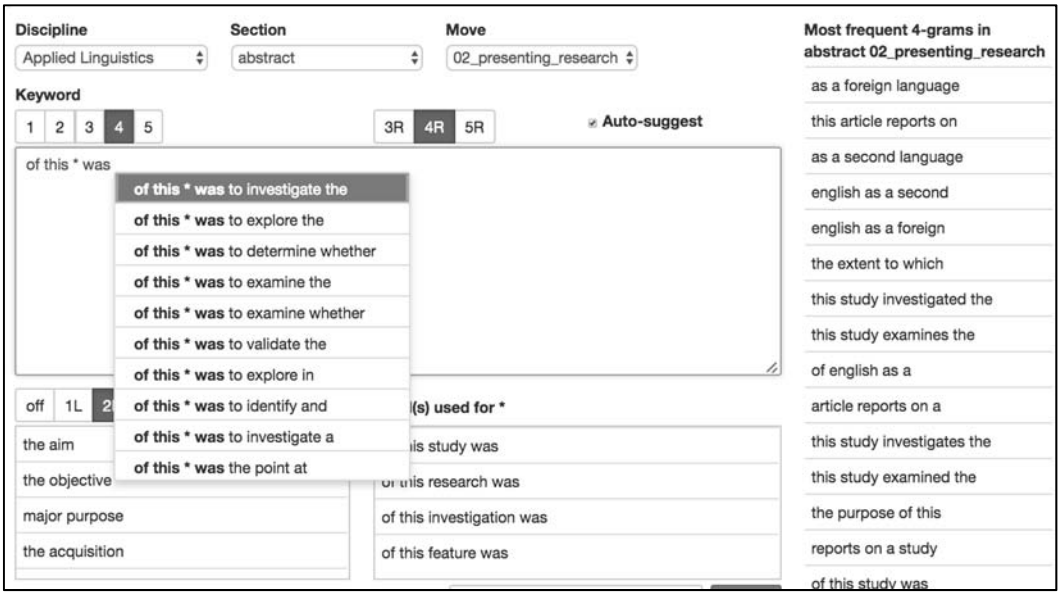
キーワード：　英語論文執筆，English for Academic Purposes，ジャンル・アプローチ

1. はじめに

各学問分野における国際競争力の向上が求められている中で，研究成果を英語で執筆する力の育成は急務である。しかし教室内での特定専門分野に対する英語ライティング指導にはさまざまな制約や限界があるため，水本 (2017) は，コーパス研究とジャンル分析における知見を融合したアプローチに基づいて，英語論文執筆支援 AWSuM（Academic Word Suggestion Machine）を開発した。

2. 英語論文執筆支援ツールAWSuM

以下の図は英語論文執筆支援ツール AWSuM（http://langtest.jp/awsum/）にアクセスし，検索を行っているものである。AWSuM は 2016 年 2 月よりオンラインで無償提供されている。



3. ワークショップの内容

ワークショップ「英語論文を書いて国際ジャーナルに掲載させるためのストラテジー」の前半では，(1) 英語論文を書くときの心構え，(2) ジャンル分析の基礎的概念，(3) AWSuM の効果的な使用方法，(4) 指導で AWSuM を利用する場合のヒント，という 4 点を紹介する。

参考文献

水本篤（編著）(2017).『ICT を活用した英語アカデミック・ライティング指導—支援ツールの開発と実践—』金星堂

国際学術誌に論文を掲載させ，量産するために：5 か国間における共同研究の事例

How to "Maximize" Publication in International Journals:
My Collaboration Experience with Researchers from Five Different Countries

ワークショップ：英語論文を書いて国際ジャーナルに掲載させるためのストラテジー２

How to Publish Research Papers in International Journals

斉藤　一弥（University of London）

キーワード： 英語論文執筆，国際共同研究事例紹介

1. はじめに

大学の国際競争力を高めるため，また研究データベース（Scopus, Orchid, Google Scholar）のさらなる発達を受け，英語で論文を書き，国際学術誌に掲載させる事の意義は年々と高まっています。特に私が所属するイギリスの大学では，Research Excellence Framework という制度があり，5 年に一回，大学の専任教員は全員，各自が出版した論文の数だけではなく，掲載されたジャーナルの難易度，引用数などの質によって点数評価され，それによって国内の大学は研究分野ごとに順位付けされます。それらの情報は公開され，将来の入学者の貴重な資料として高い影響力を及ぼします。

しかし英語を母国語としない日本人研究者にとって，5000 語から 10000 語の論文を書き，またそれを競争度が高い国際学術誌に提出し，さらに複数の査読員のコメントに対応しつつ，編集委員や編集長が納得いく様な改訂を行うことは，非常に困難な作業であるといえます。

2. 第二部ワークショップで目指すこと

私は 2012 年から 2015 年まで，日本国内（早稲田大学）に研究拠点を置き，日本，イギリス，アメリカ，カナダ，シンガポールの 5 か国の研究者達と同時に様々な共同研究プロジェクトを行いました。なるべく多くの論文を国際学術誌に掲載させる事を目標に掲げ，主・副著者として合計 30 本の論文を書き，その内 25 本が国際学術誌に受理されました。ワークショップ後半では，この実際に発表者自身が関わった共同プロジェクトの過程を紹介し，日本人研究者単独では非常にハードルが高いとされる国際学術誌出版を，どの様に達成し，さらに量産させていくべきか具体的に考察していきます。こうした共同研究の生産性を「最大限」に高めるため，ワークショップでは以下の点について焦点を当てていきます。

- 異なる国々の研究環境のメリット，およびデメリットを把握し，どの様に学術的価値の高いデータを大量に収集するべきか。
- 英語を母国語としないノンネィティブスピーカーとして，どの様なストラテジーを使い，経験値が異なる共同著者を指揮し，英語での論文を執筆，投稿，改訂を行っていくべきか。
- どの様なジャーナルの，どの様なセクションを狙っていくべきか。
- 国際学術誌の査読員，編集長とのやりとりの中で，気を付けるべき点は何か。
- さらに出版後はどの様な手段で論文を宣伝し，業界における研究の波及度を測る最も大切な指標とされる「被引用数」を，最終的にどの様に伸ばしていくべきか。

「アクティブ･ラーニング」から「主体的・対話的で深い学び」へ

The Buzzword, “Active Learning” Now Means Proactive Learning on Your Own Initiative; Learning Interactively; Learning Deeply!

中井　弘一（京都橘大学）

キーワード：問いかけによる学びの育成，気づきの育成，思考力の育成

「アクティブ・ラーニング」という言葉が教育界を席巻し，書店の本棚も「アクティブ･ラーニング」教の教えを広めるかのような賑わいの中，教育の前線に立つ教員は先行する言葉に戸惑いながら，子どもたちが討論やグループ活動などを通じて能動的に学ぶ取り組みを「アクティブ・ラーニング」と単に学習形態として捉えてきた感がある。

文科省は，２月に発表した次の指導要領の改訂案（３月末に確定版発表）で「アクティブ･ラーニングは多義的な言葉で概念が確立していない」としてその用語を使わず，「主体的・対話的で深い学び」という表現に統一した。英オックスフォード大出版局は，昨年注目を集めた英単語として「客観的な事実や真実が重視されない時代」を意味する形容詞 “Post Truth（脱真実）”を選んだが，「アクティブ･ラーニング」騒動もそうした時代を反映しているのではないだろうか。

「主体的・対話的で深い学び」は今新たに言われなくても，これまでから必要と認識されていることである。学校現場の先生も十分そのことは承知している。ただ，何をすることが必要なのかに気が囚われ，何のために必要なのか，なぜ大切なのかを十分理解し得ていないかもしれない。本ワークショップではそうしたことを踏まえ，「主体的・対話的で深い学び」には何が大切で，なぜ大切なのかを参加者と共に考えたいと思う。

生徒の意見を電子ファイル／掲示物として一気にまとめる方法

How to Make a PDF File and a Poster at One Time to Share Ideas and Thoughts

真島　由朱（大阪府立箕面高等学校）

キーワード：付箋紙，ドキュメントスキャナ，意見の共有

授業内でとりあげるトピックについて，生徒それぞれに意見を出させることがあると思うが，それをどのように活用するかという点においては，様々な方向性がある。本発表では，付箋紙・ドキュメントスキャナを利用することにより，生徒に課す課題一回分のみで

①保存―電子ファイル（pdf）として

②意見の共有―掲示物として

の両方を行う方法を紹介する。また，その方法を用いたバリエーションなども考察する。

Kahoot!で簡単クイズを作ってみよう

Create Fun Quizzes with Kahoot!

長谷川　由美（近畿大学）

キーワード： Kahoot!，Web アプリケーション，スマートフォン

ほとんどの学生が携帯電話を所有し，その多くがスマートフォン（スマホ）である現状を見ると，授業中のスマホ使用を禁止するよりも，うまくスマホを利用することを考えるのも一手であろう。本発表では，プロジェクターとパソコン（教員側），そしてスマートフォンやタブレット（学生側）があれば，簡単に選択クイズができる Web アプリケーション Kahoot! を紹介し，授業での利用方法を提案したい。

360 度カメラを使った授業記録とふりかえり

Recording and Reviewing Lectures Using a 360-degree Camera.

矢野　浩二朗（大阪工業大学）

キーワード : 360 度カメラ，授業支援ツール，VR

360 度カメラは，一つあるいは複数の広角レンズを用いて，カメラの周囲全体を一度に撮影することを可能にする。普通のカメラより視野が広いので，カメラを動かさなくても教室全体を撮影できる。これを用いて，授業の様子を録画することで，教室内で自分や受講生がどのような行動をしていたかが明らかになる。この記録を元に自分の授業中の仕草や時間配分を確認することで，有効な授業のふりかえりを行う方法を紹介した。

Effects of Implicit and Explicit Form-focused Instruction on Low-Intermediate Learners' Grammar Acquisition

明示的・暗示的フォーカス・オン・フォーム指導の初中級学習者の文法習得への効果

Shintani, Natsuko (The University of Auckland)

キーワード： explicit grammar instruction, textual enhancement, incidental grammar acquisition

This study investigated the effects of composites of three methodological devices for language teaching: metalinguistic explanation (ME), text reconstruction (TR), and textual enhancement (TE). 141 learners were divided into five groups and received instruction that differed explicitness: a) all three devices (ME, TR, and TE), b) ME and TR task with no TE, c) TR with TE, d) TR with no TE, and e) no treatment for the control group. All five groups completed an error correction test and text reconstruction tests. The results suggested that all experimental groups improved in both explicit knowledge and oral accuracy but the control group did not. The group that received instruction with all three devices showed the greatest improvement. ME provided in TR had an effect on the development of explicit knowledge and oral accuracy. TE had an effect on the learners' oral accuracy only when ME was provided before the TR tasks.

高校での Moodle を使用した反転授業の実践報告

Report on the Flipped Classroom Using Moodle at a High School

上田　愛（大阪府立長野高等学校）
篠崎　文哉（大阪教育大学附属天王寺中学校）
上田　瑠璃（大阪教育大学 大学院生）

キーワード： Moodle，反転授業，授業設計

1. はじめに

2010 年頃から欧米を中心にデジタル教材を活用した反転授業が普及してきており，日本の高校でも教科を問わずその実践が増えている（橘・荒巻・鶴田, 2014; リクルート進学総研, 2014）。しかしながら，公立高校における ICT を利用した英語の反転授業を学習者の視点から考察した実践報告はまだ少ない。そこで本研究では，オープンソースの e プラットフォームである Moodle を利用した反転授業を継続的に行った後，紙教材かデジタル教材かという学習教材の好みや授業形式等に関するアンケートを実施した。その結果をもとに反転授業の取り入れ方を議論し，提案することを目的とした。

2. 参加者と手順

大阪府立の高校生 80 名（2 クラス）を対象に，Moodle を利用した反転授業を平成 26（2014）年 4 月から翌年 10 月の間に約 50 回行った。英語表現 2 単位の中で文法を中心に指導した。参加者は，Moodle にアップロードしてある授業者による自作の文法解説動画を視聴し，解説用プリントに穴埋めをしたり，画面上で確認問題を解いたりすることが宿題となっていた。その他にも単語・イディオム問題等に任意に取り組めるようにしていた。最後にアンケート調査を行い，その結果を分析し、反転授業の取り入れ方について考察した。

3. 結果と考察

アンケート調査の結果，有効回答者数 71 名のうち 35 名の生徒が Moodle を使用した反転授業を支持しており，「事前に動画を見ていると授業が理解しやすい」「デジタルだからこそ可能な練習に取り組めた」などの Moodle 利用に対して肯定的な意見があった一方，有効回答者数 74 名のうち 62 名が宿題はデジタル教材（Moodle）より紙教材を好むとした。最も多く挙げられた理由の一つが「(Moodle は）ログインが面倒くさい」であった。従って，小張（2016）が教材の選択や学習方法，課題の出し方を反転授業の課題として挙げているが，それに加えて反転授業の実施を固定化するのではなく，Moodle 使用のメリットが顕著になるとき，つまり授業内の活動が特に反転授業を必要とする場合に取り入れていくべきであることが改めて学習者の視点から示唆された。

参考文献

小張敬之（2016）．反転授業を利用した英語教育の効果『2016 PC Conference 論文集』109-110.
橘孝博・荒巻恵子・鶴田利郎（2014）．高校情報科における反転授業の実践と課題 『2014 PC Conference 論文集』306-307.
リクルート進学総研（2014）．「生きる力」を育む反転授業 自律的学習者を育てる、授業のリ・デザイン 『リクルートカレッジマネジメント』185, 28-31.

ラウンド制授業により検定教科書を徹底多聴多読させた 1 年間の実践発表：共有出来る読解聴解対応力養成授業の普及を目指して

Pedagogical Approaches Based on Intensive Listening & Reading Aloud of Authorized Textbook: Spread and Share the Effective Teaching Idea throughout Japan

幸前　憲和（株式会社クロスインデックス）

キーワード：多聴多読，授業改革，ビートテンポ

1. はじめに

ラウンド制授業の年間に渡る調査を久々に取れる機会に恵まれた。調査校では筆者を含め 5 教員でラウンド制授業を展開した。前年度より授業が活性化されたとの生徒からの声が全クラスから多数聞ける結果となった。なぜこのような結果が出たかを質的量的データを元に発表する。

ラウンド制リーディング授業とは簡単に言えば音声 Input と Output のラウンドを追うごとの漆塗りである。1～3 ラウンドではインプット(Processing Data)英文の内容理解，4～6 ラウンドではインテイク(Developing System)文構造の理解と音読練習，7～9 ラウンドではアウトプット(Accessing Data)リプロダクションからコミュニケーション活動へ(鈴木，2008)の流れが一般的である。

2. 参加者と手順

参加者は保健体育科(教科授業は午前中のみで午後の大半は体育実技か部活等)の高校 1 年生 154 名であった。全 7 クラスでラウンド制共通教材を使用した。参加者は，前年度はグラマートランスレーション型授業を受けていた。事情により量的データは 4 クラス，質的データは 3 クラスしか取れなかった。

3. 結果と考察

平成 28 年度首都圏某私立大学主催模試 (英語)100 点満点/60 分	4 月平均点	12 月平均点	上昇率
高校入学時成績最上位者選抜クラス (中堅教員担当) 39 名	48.2 点	51.1 点	約 3 点
高校入学時成績上位者選抜クラス (筆者担当) 40 名	47.6 点	57.8 点	約 10 点
高校入学時成績中低位者混在クラス (筆者担当) 39 名	31.1 点	35.0 点	約 4 点
高校入学時成績中低位者混在クラス(ベテラン教員担当) 36 名	30.5 点	28.8 点	ー約 2 点

量的調査では筆者担当のあるクラスでは 12 月時点での大きな上昇が見られた。質的調査の項目「英語への好感度(英語が好きになったか)」ではどのクラスでも上昇を示した。説明控えめでテンポ重視の生徒中心授業展開を仕向ける教材に大きな要因があったように思われる。実施内容についてはフラッシュカードやペア活動が軒並み高評価であったのに比べ，各パートを様々な方法で 10 回音読する“10 回読み”では音声中心指導歴が浅い担当者クラスでは評価は低かった。本学会でのラウンド制授業発表は今回で 3 回目になるのだが，ラウンド制授業を共有しているにも関わらず毎回筆者担当クラスが実験群でその他教員クラスが統制群であるような結果が現れる傾向があるのだが，これは反対にラウンド制授業に教員が習熟すればするほどある程度約束された優位な結果が得られる可能性があるとも考えられる。

参考文献

鈴木寿一(2008).「大学入試とコミュニケーションに対応できる英語力を育成するラウンド制指導法」近畿地区英語教育フォーラム資料.

分散学習は意味的に関連した単語の習得を促進するか？
干渉効果と分散効果の検証

Does Spacing Facilitate the Learning of Semantically Related Words?
An Investigation on the Effects of Interference and Spacing

中田　達也（関西大学）　鈴木　祐一（神奈川大学）

キーワード： 語彙習得，干渉効果，分散効果，意味的関連性

1. はじめに

意味的に関連した単語（例. 動物や果物の名前）を同時に学ぶと干渉が起こるため，語彙学習が阻害されると多くの研究者は指摘している(e.g., Nation, 2000; Schmitt, 2007; Tinkham, 1997)。しかしながら，実証研究の結果は必ずしも一貫していない。本研究では，先行研究の問題点を改善した上で，意味的に関連した単語を同時に学ぶことの効果を検証した。さらに，学習間隔を広げることで干渉が抑制され，意味的に関連した単語の習得が促進されるという仮説(Nation, 2000; Schmitt, 2007)を検証するため，学習間隔が意味的に関連した単語の習得に与える影響も調査した。

2. 方法

参加者は，133 人の日本人大学生であった。参加者はコンピュータ・プログラムを使い，48 の英単語とその意味を学習した。学習対象語の半分は意味的関連性がある単語であり（例. raccoon, weasel），残りの半分は意味的関連性のない単語であった（例. apparition, pigment）。学習者は集中学習条件と分散学習条件とに割り当てられた。集中学習条件では，同一カテゴリの単語が連続して出題された。分散学習条件では，同一カテゴリの単語が間隔を置いて出題された。学習の直後と一週間後に英日翻訳テストを行い，意味的関連性および学習間隔（集中学習または分散学習）が語彙習得に与える影響を測定した。

3. 結果と考察

分析の結果，意味的関連性がある単語と意味的関連性がない単語の間で，直後テストおよび遅延テストにおける正答率に統計的に有意な差は見られなかった。この結果は，「意味的に関連した単語を同時に学ぶと干渉が起こるため，語彙学習が阻害される」という従来広く信じられてきた主張(e.g., Nation, 2000; Schmitt, 2007; Tinkham, 1997)と一致しないものであった。さらに，事後テスト得点において，意味的関連性と学習間隔との間に有意な交互作用が見られた。多重比較の結果，(a) 意味的関連性の有無にかかわらず，分散学習の方が集中学習よりも語彙習得を促進すること，(b) 分散学習は，特に意味的関連性がない単語の習得を促進することが示された。この結果は，「学習間隔を広げることで干渉が抑制されるため，分散学習は特に意味的に関連した単語の習得を促進する」という仮説とは逆の結果であった。発表では，desirable difficulty framework (Bjork, 1994)等の観点から，これらの結果について考察する。

参考文献

Bjork, R. A. (1994). Memory and metamemory considerations in the training of human beings. In J. Metcalfe & A. Shimamura (Eds.), *Metacognition: Knowing about knowing* (pp. 185–205). Cambridge, MA: MIT Press.

Nation, I. S. P. (2000). Learning vocabulary in lexical sets: Dangers and guidelines. *TESOL Journal, 9*, 6–10.

Schmitt, N. (2007). Current trends in vocabulary learning and teaching. In J. Cummins & C. Davison (Eds.), *The international handbook of English language teaching* (pp. 827–842). Norwell, MA: Springer.

Tinkham, T. (1997). The effects of semantic and thematic clustering on the learning of second language vocabulary. *Second Language Research, 13*, 138–163.

会話相手による L2 WTC の変化について：L2 能力の異なる学習者群の比較から

How does WTC in Undergraduates Change According to Interlocutors: A Comparison of Upper and Lower Proficiency EFL Students

鎌田　理星（関西大学 大学院生）

キーワード： Willingness to communicate (WTC)，スピーキング，English proficiency

1. はじめに

WTC の研究は，第一言語から第二言語のコミュニケーションに応用され，現在ではグループの大きさやトピックの種類といったコミュニケーションの状況による WTC の変化に着目した研究も盛んである (Kang, 2005; Peng & Woodrow, 2010)。一方，EFL 環境の日本人学習者を対象に，会話相手による WTC の変化を調べた研究は筆者の知る限り見受けられない。本研究では，学習者の WTC が 3 種類の会話相手（クラスメイト，日本人英語教師，外国人英語教師）において異なるのかを調査した。また，対象者を英語力により上位群・下位群に分類し，2 群間で WTC の変化に違いがあるかも比較した。

2. 参加者と手順

参加者は，EFL 環境下で英語を学習している日本人大学生 237 名である。調査には Weaver (2005) の質問紙を改良したものを用い，研究へのデータ使用の同意を得た上で質問紙調査を実施した。また参加者には，英語力の確認のため TOEIC や TOEFL 等の英語能力検定試験のスコアの報告を依頼した。

3. 分析

分析は二段階に分けおこなった。まず全体のデータに対して一元配置の分散分析を行い，その後上位・下位各群に再度一元配置の分散分析をおこなった。

4. 結果と考察

分析の結果，学習者の WTC は外国人英語教師との会話で最も高く，次いで日本人英語教師，クラスメイトの順となった（全ての間に有意差あり；効果量大程度）。また，全ての会話相手において上位群の WTC は下位群より高くなった。さらに上位群においては，外国人英語教師との WTC のみが，日本人英語教師，クラスメイトと比較して有意に高かった（効果量大程度）。会話相手による WTC の変化に強く影響を与えている主な要因は，相手からの否定的な評価や反応を恐れることによる不安と，相手が自分の英語力を高めてくれる対象であると判断した際に高まる excitement （Kang, 2005）であると考えられる。ただし本研究の参加者は総じて英語力が高く，留学経験のある学生も多いため，今後は英語力の異なる学習者を対象とした研究が必要と思われる。

参考文献

Kang, S. J. (2005). Dynamic emergence of situational willingness to communicate in second language. *System, 33*, 277–292.

Peng, J.-E., & Woodrow, L. (2010). Willingness to communicate in English: A model in the Chinese EFL classroom. *Language Learning, 60*, 834–876.

Weaver, C. (2005). Using the Rasch model to develop a measure of second language learners' willingness to communicate within a language classroom. *Journal of Applied Measurement, 6*, 396–415.

日本の高校生のデジタル媒体「宿題」に関する認知：Cengage Learning- MyELT を使用した混合研究法調査

Japanese High School Students' Perceptions about Online Homework:
Mixed Method Research Using MyELT by Cengage Learning

小島　修司（啓明学院中学校高等学校，テンプル大学 大学院生)

キーワード： ICT に関する認知, 家庭学習, LMS

1. はじめに

ICT を駆使した e-Learning の開発・展開が進む英語教育界において，受け手側である，生徒・学生の教材選択権，またはそれに対する認識に関する調査はこれまで十分に行われていない。授業外で使用される機会も多い ICT 教育は，そのあり方，特に家庭学習についての多面的な調査が必要である。本研究では Cengage Learning が提供する LMS の一つである MyELT を使用した家庭学習を通し, 日本の高校生が, どのようにデジタル媒体の宿題を評価するのかを調査した。

2. 参加者

西日本にある中高大一貫校の高校 3 年生 236 名（17-18 歳, 男子 107 名：女子 129 名）を対象に調査が行われた。生徒は 1 週間に 3 コース（それぞれ 45 分×2）の英語の授業を受け，そのうちのライティング活動を中心とした 1 コースで ICT を使用した活動ならびに家庭学習（課題）を 1 年間行なった。

3. 手順

ライティング活動を中心とした授業では Great Writing 2: Great Paragraphs (Folse et al. 2014)が主に使用された。生徒は紙ベースの教科書とともに，e-book としてのワークブックを使用した。担当教員は National Geographic Learning/ Cengage Leaning が運営する MyELT という学習管理サービス(LMS)を利用し，生徒の学習状況を管理した。生徒は個々人のページをオンライン上に持ち，主に復習を目的とした家庭学習（宿題）を約一年間行った。事前調査として，生徒たちの家庭におけるデジタル機器利用環境等を調査し，本調査では 6 件法を用い，デジタル媒体宿題に関する記述統計を用いた量的分析，そして自由記述式の質問紙を使用して得られたデータを質的データ分析ソフト MAXQDA を用いて分析した。

4. 結果と考察

6 件法を用いた質問において「デジタル媒体の宿題はやりやすい」（M=3.70, SD=1.66, Median=4.00, Mode=4 &6）と「紙の宿題の方が良い」（M=3.09, SD=1.51, Median=3.00, Mode=3）の項目に表されるように, 参加者はデジタル媒体の宿題に対し比較的好意的な認知をしていることがわかった。続く MAXQDA を用いた質的分析において詳細な内容分析を行った。オープンコーディングにより設定されたコードを分析することにより 5 つのコードグループが確認できた。そのうちの 2 つである「デジタル媒体にポジティブな意見」（139 件）と「デジタル媒体にネガティブな意見」（103 件）を精査する中で，デジタル教材自体に問題点を感じるよりも，PC の操作感，デバイス画面の小ささ等といったハード面での不便さがデジタル媒体を用いた学習に対してネガティブな意見をもたらしていることがわかった。また，具体的な「紙媒体との比較」グループでは紙より気軽にできてやる気が起きるといった，明確な利点が述べられ，デジタル媒体による家庭学習に対し肯定的な視点が確認できる結果が得られた。

英文論文執筆支援ツール AWSuM の有用性の検討
—パイロット・スタディ—

Investigating the Usefulness of AWSuM: A Pilot Study

水本　篤（関西大学）

キーワード：英語論文執筆，ツール開発，ジャンルに基づいた英語ライティング指導

1. はじめに

AWSuM（Academic Word Suggestion Machine）は，English for Specific Purposes で用いられるジャンル・アプローチと，コーパス研究で利用される語連鎖（lexical bundles）を組み合わせることによって実現された英語論文執筆支援ツール（http://langtest.jp/awsum/）であり，理論的基盤に依拠して開発された（水本, 2017; 水本・浜谷・今尾, 2016; Mizumoto, Hamatani, & Imao, in press）。本発表では，パイロット・スタディとして AWSuM を実際に論文執筆に利用したユーザーの感想を調査し，その有用性を検討する。

2. 参加者と手順

参加者は，応用言語学系の卒業論文，修士論文を英語で書く必要がある 6 名の学部生と 2 名の大学院生であった。自己申告による英語習熟度テストの点数は，Common European Framework of Reference (CEFR) における B2（自立した言語使用者）から C1（熟達した言語使用者）のレベルであった。6 名のユーザーは 2 ヶ月から 5 ヶ月の間，AWSuM を使用するごとに自由記述によるフィードバックを Google Form 上で記録していった。パイロット・スタディ後，自由記述は 2 名の評価者によって概念ごとにコーディングされ，一致度を示すカッパ係数は 0.83 と高い値になった。

3. 結果と考察

分析の結果，ユーザーからのフィードバックは，(1) 語彙文法パターンへの気づき（発見），(2) 語彙文法パターンの確認（参照），(3) AWSuM に特徴的なもの，(4) 英語での論文執筆への自信と自律性の向上，(5) ツールへの改善コメントの 5 つに分類され，AWSuM の使用がジャンルに基づいた英語論文執筆指導のサポートとなり得ることが示唆された。

謝辞　本研究はJSPS科研費 基盤研究(B) 17H02369 の助成を受けたものである。

参考文献

水本篤（編著）(2017).『ICT を活用した英語アカデミック・ライティング指導—支援ツールの開発と実践—』金星堂 Retrieved from http://kuir.jm.kansai-u.ac.jp/dspace/handle/10112/11019

水本篤・浜谷佐和子・今尾康裕 (2016).「ムーブと語連鎖を融合させたアプローチによる応用言語学論文の分析—英語学術論文執筆支援ツール開発に向けて—」*English Corpus Studies, 23*, 21–32. Retrieved from http://mizumot.com/files/ecs2016.pdf

Mizumoto, A., Hamatani, S., Imao, Y. (in press). Applying the bundle-move connection approach to the development of an online writing support tool for research articles. *Language Learning*. Retrieved from http://mizumot.com/files/LL-AWSuM.pdf

日本語母語話者が持つ音象徴の感覚：架空キャラクターのネーミング調査から

Sound Symbolism Observed among Native Japanese Speakers:
Analyses of Fictional Character Naming Survey

中西　のりこ（神戸学院大学）

キーワード： 音象徴，ネーミング，英語音素の知覚イメージと産出イメージ

1. はじめに

音象徴とは，特定の言語音が何らかの意味やイメージを喚起するという考え方である（Hinton, Nichols, & Ohala, (Eds.), 1994）。語が持つ意味とは別に，音そのものに対してヒトが無意識に感じるこのようなイメージが実際に存在するなら，音声面での外国語習得の一助となる可能性が期待される。そこで中西（2017）では，日本語・英語・中国語母語話者（*N*=322）が，英語の特定の母音と子音で構成される無意味語に対してどのようなイメージを持つかを「評価性・力量性・活動性」という 3 つの尺度を用いて分析した。この調査は聞こえてきた音を各母語話者がどう知覚するかを探るものであったが，本研究では日本語母語話者が持つ音象徴のイメージの傾向を産出面から探る。

2. 参加者と手順

京阪神の高校生・大学生 267 名を対象に「新作の映画・ドラマ・ロールプレイイングゲームなどのクリエーターとして架空のキャラクターをイメージし名前をつける」というタスクを以下の手順で課した。1) 提示された 18 対の形容詞を用いてキャラクターの特徴を描写する。2) 提示された英語の 7 子音・6 母音を用いてキャラクター名を設定する。このデータを中西（2017）と比較するため，キャラクターの特徴を示す形容詞と名前に含まれる音素の関係を「評価性・力量性・活動性」の 3 つの尺度にまとめた。

3. 結果と考察

分析の結果，「前舌母音 /iː, ɪ, ɪə˞/ や無声阻害音 /p, f/ は[＋評価性] [－力量性]，r 音性母音 /ɪə˞, ʊə˞/ は[＋力量性][－活動性]，有声閉鎖音 /b/ は[－評価性] [＋力量性]，有声摩擦音 /v/ は[＋活動性]，接近音 /w/ は[－活動性] に分類される形容詞との結びつきが強い」という点で中西（2017）の知覚タスク結果と今回の産出タスク結果で一致が見られた。つまり，「音を聞くと感じられる」という知覚面においても，「音をイメージするときに感じられる」という産出面においても，/iː, ɪ, ɪə˞/ や /p, f/ には「良い・弱い」，/ɪə˞, ʊə˞/ には「強い・遅い」，/b/ には「悪い・強い」， /v/ には「速い」，/w/ には「遅い」などのイメージが伴うことが示唆された。

これらの傾向は様々な言語母語話者・研究手法を用いた先行研究で確認されており，構音活動・音の周波数成分・脳のしくみなどを根拠とした説明がなされている。日本語を母語とする高校生・大学生にもこのような感覚が備わっていることが示唆されたことから，英語音声指導時に音象徴という現象を利用すれば，学習者が音のイメージを感覚的に捉えられるような指導が可能になると考えられる。

参考文献

Hinton, L., Nichols, J., & Ohala, J. J. (Eds.) (1994). *Sound symbolism*. New York: Cambridge.

中西のりこ（2017）．音象徴の普遍性と言語個別性—英語・中国語・日本語母語話者の比較—『応用言語学の最前線—言語教育の現在と未来』158-169.

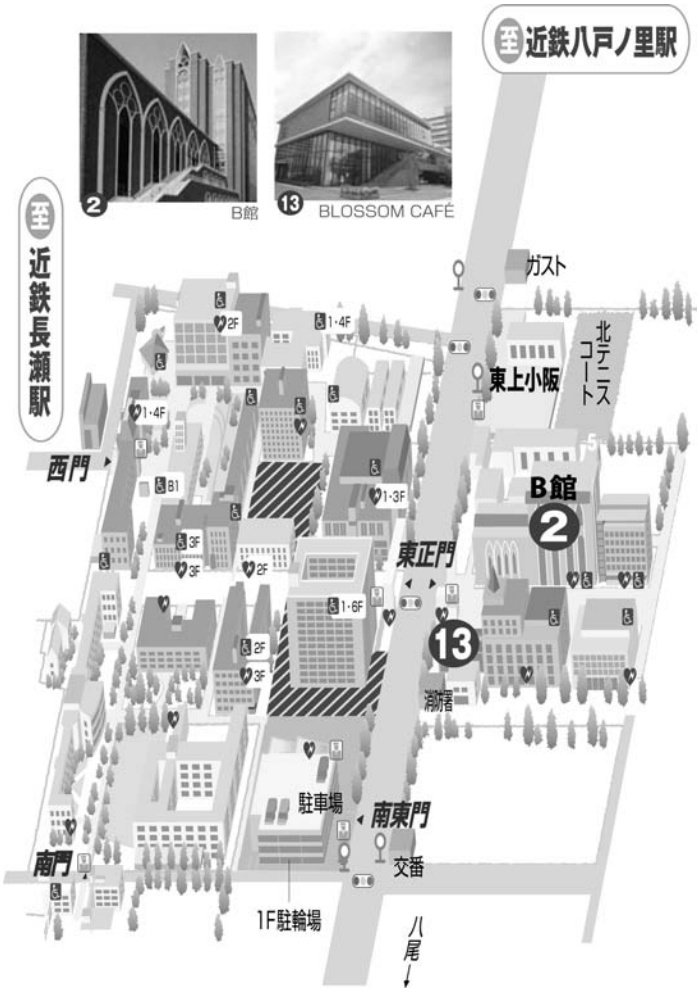
お願い

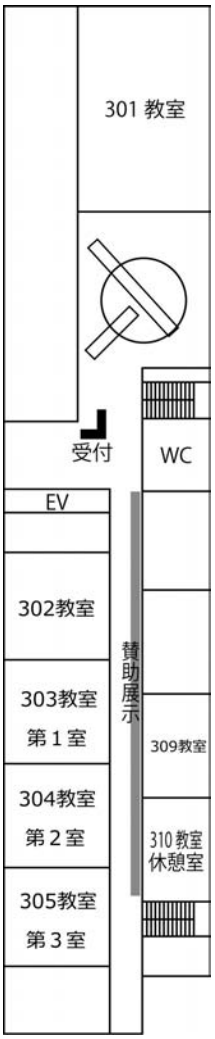
- 住所、電話、勤務先、E-mail アドレス等の変更は、LET 本部の HP（http://www.j-let.org/）から「ID」と「パスワード」を入力してログインしていただき、各自で手続きをお願いします。ID は事務局からの発送物宛名シールに記載されています。パスワードは LET 本部 HP から再設定することができます。
- 新年度にともなう会員資格の変更（個人会員、学生会員）につきましては、必ず、支部事務局までお知らせ下さい。また、学籍をお持ちでも「専任職をお持ちの先生方」は「個人会員」でご登録ください。
- 年会費（個人会員 6,000 円、学生会員 3,000 円）は、4 月下旬に別便で送付しました「郵便振込票」でお納めください。支部大会当日のお支払いはご遠慮ください。
- 支部研究集録のバックナンバーなどの入手をご希望の方は、支部事務局までお問い合わせください。
- 支部事務局へのご連絡は、E-mail（kansailet@gmail.com）あるいは LET 関西支部 HP（http://www.let-kansai.org/）トップページの「お問い合わせ」をご利用ください。

会場への交通案内

- 近鉄大阪線長瀬駅下車徒歩 15 分、同八戸ノ里駅下車徒歩 17 分、同バス 5 分（71, 75, 76, 77 系統。東上小阪停留所下車すぐ）。ただし、大学提携の直通バス（100 系統）は日曜日は運行しておりませんので、ご注意ください（http://www.kintetsu-bus.co.jp/route/kindai/）。

会場案内図

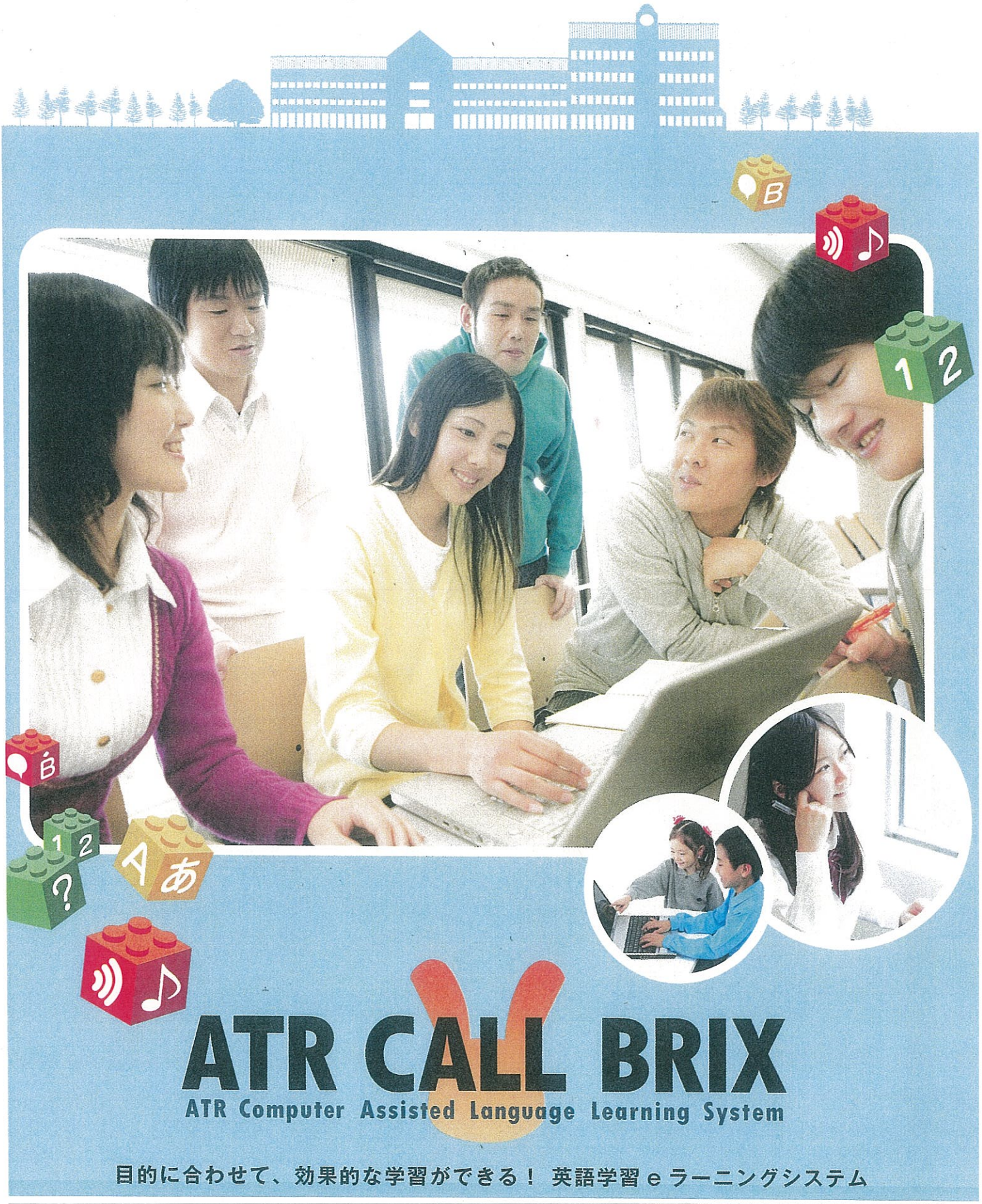




UCHIDA

ウチダホームページアドレス
▶http://school.uchida.co.jp/

製品紹介ホームページアドレス
▶http://www.atr-lt.jp/products/brix/index.html



ATR CALL BRIX

ATR Computer Assisted Language Learning System

目的に合わせて、効果的な学習ができる！ 英語学習ｅラーニングシステム

内田洋行 公共本部

東京 〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25 ☎ 03(5634)6402

大阪 〒540-8520 大阪市中央区和泉町2-2-2 ☎ 06(6920)2641